

平成 22 年度 学校研究 研究紀要

研究主題

一人ひとりの「ゆたかな学力」を 育む学校づくり

～学習意欲の向上と学習習慣の定着をめざして～



能美市立寺井中学校

[能美市立寺井中学校 平成 22 年度 学校研究のまとめ]

◆本編

p. 1	I. 主題設定の理由
	II. 研究の経緯
	研究組織
p. 2	全体構想図
p. 3	III. 本年度の研究の内容
	IV. 研究実践
	◇学力向上をめざす“寺井中スタイル“の確立と実践
	A. 確かな学力を培うための取り組み
	1. 「授業改善のための3つの視点」に基づく授業改善
p. 5	2. 「授業研究・模擬授業」による実践研修
p. 7	3. 言語活動の充実
p. 8	4. 習熟度別少人数授業の充実
p. 9	5. 基礎的な知識・技能の習熟の徹底
	6. 家庭学習の充実
p.10	7. 研究実践の計画的な評価と改善
p.12	8. 外部講師による指導助言
	9. 生徒・保護者等への啓発
p.13	B. 豊かな心を育むための取り組み
	1. 「心のテーマ」を軸とした道徳・特別活動等の実践
	2. 「道徳の時間」の実践
p.14	3. 特別活動等での実践
p.15	C. 研究実践の公開
p.16	V. 研究の成果と課題
p.18	◇本年度の研究のおもな歩み
裏表紙	研究同人

◆資料編 (別冊)

1. 「各教科における学力向上に向けた授業改善の方策 (vol.3)」
2. 「学習意識調査等の集計結果」
3. 「NOMI ばんぶー寺井」レポート及び感想
4. 太田あや氏「500冊のノートを取材して気づいたこと」講演会記録
5. 寺井中学校「心のテーマ」

能美市立寺井中学校 平成 22 年度 学校研究

《研究主題》

一人ひとりの「ゆたかな学力」を育む学校づくり ～学習意欲の向上と学習習慣の定着をめざして～

I. 主題設定の理由

学力向上のためには、学習の主体者である生徒が意欲的に取り組むことが大切であり、その学習の成果をより確実なものとするのが次へのステップにつながると考えた。

そのためには何より、教師の指導力の向上と授業の絶え間ない工夫・改善が求められる。そしてそれらは適切な評価活動に裏打ちされたものでなくてはならない。

また、自己有用感や自己達成感を伴った豊かな心をあらゆる教育活動の中で育み、生徒が将来に夢や希望をもって主体的に学習に取り組めるような基盤をつくるのが大切である。

そこで「豊かな心」を基盤とした「確かな学力」の向上を願って研究主題を設定した。

II. 研究の経緯

学習意欲の向上と学習習慣の定着といった視点から、生徒一人ひとりの確かな学力を育む学校づくりをめざして、平成 17 年度より 3 年間、文部科学省の学力向上拠点形成事業（確かな学力育成のための実践研究事業）の指定を受け、研究実践を進めるとともにその成果を発信してきた。

平成 20 年度からは、それまで培ってきた研究実践を『学力向上をめざす“寺井中スタイル”』として確立させることに力を注いできた。また、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、「課題を読み取る力」「考えをまとめ表現する力」「学習内容を活用する力」など、いわゆる「活用力」の向上に目を向けて研究を進めている。

《研究組織》

研究推進委員会

教務部兼任（教務・研究・学年主任含む）

確かな学力の向上

《研究推進委員会》

1. 3つの視点を軸とした授業改善を通して、基礎的な知識・技能の習得と思考・判断・表現の力の育成を図り、さまざまな課題に積極的に対応し解決していく力を伸ばす。
2. 学力調査や学習意識調査などの追跡を通して学力の定着や学習意欲の維持向上を検証し、その結果を次の指導にいかすことで、確かな学力のいっそうの定着を図る。

豊かな心の育成

《道德部会・特活部会》

3. 「心のテーマ」を中軸に据えた道德教育全体計画(関連表)を活用し、領域を超えて総合的に道德教育を進める。
4. 特別活動をはじめとするすべての教育活動を通して、自己有用感、自己達成感のある豊かな心を育て、より確かな学習の基盤づくりを進める。

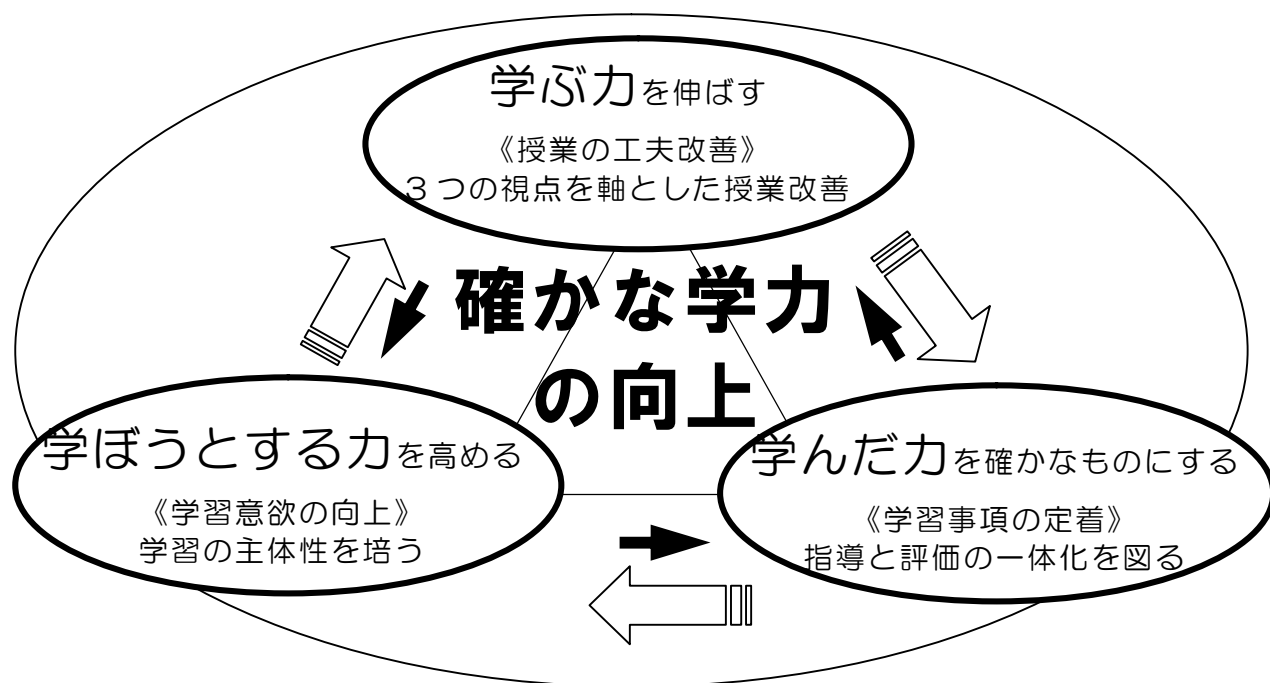
教科部会：国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術・家庭、英語の各部会

各学年会・生徒会指導部会等

《全体構想図》

研究主題

一人ひとりの「ゆたかな学力」を育む学校づくり
 ～学習意欲の向上と学習習慣の定着をめざして～



豊かな心の育成

＜ 自己有用感・自己達成感 ＞

道徳教育の充実

- ・授業力の向上
- ・心のテーマを軸とした指導計画の見直し
- ・道徳的判断力・実践力の育成

特別活動の充実

- ・学校行事の工夫改善と充実
- ・キャリア教育の推進
- ・生徒会活動の充実
- ・学級活動の充実
- ・部活動の充実

総合的な学習の充実

- ・計画的・系統的な実践と工夫改善
- ・自ら課題を見つけ、解決する力の育成
- ・ボランティア体験活動の充実

教育相談活動の充実

- ・生徒理解のための研修と実践
- ・生徒理解強化月間の工夫と充実
- ・教育相談室の充実
- ・SSW およびスクールカウンセラーとの連携

Ⅲ. 本年度の研究の内容

学習意欲の向上と学習習慣の定着といった視点から、生徒一人ひとりの確かな学力を育む学校づくりをめざす。

平成 22 年度は、これまでの研究成果を総括して『学力向上をめざす“寺井中スタイル”』の確立と実践を目指し、昨年度末に挙げられた【言語活動の充実による学びの定着】【家庭学習の習慣化】を重点課題に掲げ、新学習指導要領の趣旨をふまえながら、研究実践を進めてきた。

具体的な取り組み

＜授業改善・授業力向上のために…＞

○「学力向上のための 3 つの視点」をいかし、授業改善に努める。

視点①：基礎・基本の定着を図る

視点②：言語活動を重視し、活用力を高める

視点③：意欲を高めるための言葉かけを工夫する

○ 研究授業・模擬授業・リレー授業を授業研究の中心に据え、教師のさらなる授業力向上を図る。

○ 少人数授業の持ち方を工夫・改善する。（意図を明確にしたクラス設定、TT との柔軟な組み合わせなど）

○ 基礎的な知識・技能の習熟の徹底を図る。（演習量の確保、体験的な習得など）

○ 生徒による授業評価を導入する。（生徒の視点による授業評価によって、授業の検証を図る）

＜自主的な学習を進めるために…＞

○「心のテーマ」を中心に道徳教育、特別活動、各教科等の関連を図り、相互の充実に努める。

○ キャリア教育の推進やボランティア体験活動の充実により豊かな心の育成を図る。

（将来への夢、自己肯定感、社会の中での役割と自己有用感など）

○ 家庭での学習習慣や生活習慣の改善を図る。

（学習の仕方の指導、宿題・家庭学習の習慣化、学習時間の確保、保護者との連携）

Ⅳ. 研究実践

☆『学力向上をめざす“寺井中スタイル”』の確立と実践

平成 17 年度から積み上げてきた本校の学力向上に向けての研究実践は、これまで大きな成果を挙げてきた。学力向上拠点校としての文部科学省指定が解けた平成 20 年度以降は、これまでの研究で培ってきた成果をよりシンプルで実践しやすい形に整え、『学力向上をめざす“寺井中スタイル”』として確立させ、それを実践に移していくことに力を注いできた。

A. 確かな学力を培うための取り組み

1. 「授業改善のための 3 つの視点」に基づく授業改善

確かな学力を培っていく上で、教科共通の本質的な視点をもつことは、学校全体がひとつの方向に足並みを揃えていくために大変重要なことである。これまでの研究成果を踏まえ、今年度は次の 3 つの視点を掲げて授業改善に取り組んできた。

《授業改善のための3つの視点》

- ① 基礎・基本の定着を図る
- ② 言語活動を重視し、活用力を高める
- ③ 意欲を高めるための言葉かけを工夫する

① 「基礎・基本の定着を図る」は、学習を進めていく上でより生徒の理解が確かなものになるような工夫をすることと学習したことを定着させていくことである。

前者は、昨年度までの取り組みであった「課題を工夫し課題を読み取る力を育てる」と授業設計の段階で課題解決の状況を設定することである。まずは課題について自己解決し、それを周りに広げ、最終的には学級全体で課題について考えることである。自分の考えを周りに広げていく方法は、座席の隣同士で思いを伝えあうペア学習や3～5人の少人数グループ学習などの形態が考えられる。

質問		H19	H20	H21	H22
1	授業のめあて（ねらい）はつかんでいる	61	74	78	81
2	授業には、やってみたいと感じるテーマや課題が多い	51	54	56	63
3	ペア・グループ学習では協力し積極的に取り組んでいる	83	81	81	87

（数字はすべて%で「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計である）

後者は、学習内容の定着についてであるが、これは習熟の機会や時間を増やすことや体験的な活動によって効果を生むものであると考えている。教科内容の読解や理解・思考・表現は、教科の専門用語を使って行われることが多い。専門用語の習熟は、どの教科においても大きな課題の一つである。社会科の原則毎時間授業はじめに行っている5問テストや数学科のミニテストによるこまめなふりかえりの指導、理科の仮説を立て実験をし結果をレポートにまとめるという一連の流れ、英語科の単語テスト、国語科の漢字テストなども効果を上げている工夫である。なかでも、1年生が終礼時に毎日行っている英文マラソンの取り組みは、毎日の自主勉強の取り組みと連動させながら継続しており、大きな成果を上げている。

② 「言語活動を重視し、活用力を高める」は、授業の中で生徒が自分で考えたり、その考えをまとめたり、発表したり、他の人の考えを聞いてさらに自分の考えを深めたりすることを通して、それらの力を高めると同時に、これまで培った基礎的・基本的事項を活用していく力を伸ばしていこうとするものである。特に、生徒が自分の言葉で考えをまとめたり、生徒の言葉をつないで発表したりすることを重視してきた。ホワイトボードを使って発表するとき、個人やグループの考えをホワイトボードにキーワードで書き、説明は自分の言葉で行うということや授業の終末で今日の学習を自分の言葉でまとめるという活動がこれにあたる。ただ、まだまだ定着していないのが現状であり、今後の課題となっている。



質問		H19	H20	H21	H22
1	授業の中に、考える場面や発表する場面がある	54	80	73	87
2	自分の考えを発表したり話し合ったりすることは好き	—	33	32	51

(数字はすべて%で「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計である)

③ 「意欲を高めるための言葉かけを工夫する」とは、生徒の活動や発言に対してしっかりと価値づけるような言葉かけを行い、生徒に自信を持たせ、意欲を高めていこうとするものである。指導者は、生徒のがんばりやつぶやきを見逃さないことを心がけると同時に、生徒をほめるタイミングを外さないことにも心を配ってきた。ただ単にほめるのではなくどこがどのように良いのかを生徒一人ひとりに伝え、集団に伝えることによって、生徒がよいところをまねるようになり、学習集団として望ましい方向に向かうようになる。

質問		H19	H20	H21	H22
1	先生は、やる気の出るような言葉をかけてくれる	56	63	60	69
2	授業での先生の説明やアドバイスはわかりやすい	76	83	86	88
3	先生は、できないで困っている時、教えてくれたりできるように支援してくれたりする	75	81	81	84

(数字はすべて%で「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計である)

2. 「授業研究・模擬授業」による実践研修

今年度は5月と9月に教材研究・学習指導案作成のあと、教科の枠を超えた3つのグループに分かれて“模擬授業”を行い、「授業改善の3つの視点」に沿って、生徒の視点から指導案を検討した。

模擬授業では、教科専門の違った者同士が話し合うことで、より生徒の思考の流れにあった授業の進め方や問題点が見えやすくなった。

今年度は、模擬授業の中で、視聴覚機器を利用した。生徒の立場で体験することができ、利用する良さを見つけることができた。

また、授業研究は、技術家庭科や保健体育科・美術科など、技能教科についても実施でき、いろいろな教科実践を広く共有して相互に高めあうことができた。

今後は、模擬授業については技能教科なども含め、さまざまな教科で取り組むようにしていきたい。それにより、その教科の学習内容だけでなく、より生徒の立場にたった考え方で、自分の授業にいかすことができると思われる。

授業力向上のために

指導案作成⇒【模擬授業】⇒指導案検討
⇒【研究授業】⇒授業整理会

◇研究授業を参観する際の視点

- ①生徒は課題を把握・理解・読解できていたか
- ②生徒は話し合いなどの活動を十分に行っていたか
- ③生徒の発言やつぶやき、活動などに先生から適切な声かけ(評価)がなされていたか
- ④その他、気づいたこと

《教科の枠を超えた“授業交流”》

研究のねらいである「言語活動の充実による学びの定着」や「基礎基本の定着」を図るために、今年度は管理職をはじめ全教員に対し、一人1回以上授業を公開し合う取り組みを行った。指導案の準備は必要なく、気軽に授業を見せ合う雰囲気も少しずつ出てきた。公開授業後には簡単な感想をメモして渡した。



「言語活動の充実」では、グループでの話し合い活動や、思考の根拠をはっきりとさせた発表などが取り組まれた。「基礎基本の定着」では、数学科でのミニテストや社会科での5問テストなどに取り組んでいた。

今後は、教科の中での授業交流だけでなく、教科を越えて学年の中で授業交流を行い、声かけの仕方や話し合い活動の取り組みなど、学年の中での共通性を図っていくことも考えていきたい。

模擬授業に限らず、授業交流の方法は状況に応じて柔軟に考えるべきであり、研究主題にも「～学校づくり」とあるように、一教科の中で閉じるのではなく、ひとつの方向に向かって学校全体で取り組んでいく姿勢を継続していきたい。

《道徳・学級活動の“リレー授業”》

(1) はじめに

11月の指導主事要請訪問に合わせて、道徳・学級活動の研究実践期間を設け、共通の題材について指導案を検討したり、授業交流で意見交換をしたりして、学年単位で研鑽を深めた。その際、ある一つの授業を行い、それを次の授業者や研究授業者が参観して意見交換し、それを受けてまた次の授業者が授業を行う…といったリレー形式で授業を行った。互いの授業を見合い、意見交換を重ねながら練り上げていくといった研修体制で、授業力の向上や学年の一体感の高まりが感じられ、効果的であった。

(2) リレー授業の実際

3年生では、「心をひとつに」(2-(2)おもいやり)を資料に、リレー授業を行った。

① 第1回

研究授業者で行う指導案を元に授業を行った。その結果、主題とする内容項目を明確にするための導入や発問の工夫が必要であることがわかった。

② 第2回

第1回で、導入に阪神淡路大震災(兵庫県南部地震)のことを取り扱うと、価値項目が「強い意志」となってしまう、主題にせまりにくかった。そのため導入は、アンケート「クラスの良いところはどんなところですか？」を事前に実施し、その結果を紹介することにした。授業の結果、板書を工夫することが課題として出てきた。

③ 第3回

第2回で、中心発問に対する意見を、誰に対する気持ちかを「感謝」という語句を中心に表現してみた。板書計画を見直し、全体を整理した。授

業の結果、誰に対する感謝の気持ちかがわかりやすい板書となった。

④ 研究授業

時間配分など些細な問題もあったが、ねらいにせまる授業を実施することができた。

(3) 授業を終えての成果と課題

① 成果

- ・ 指導案をじっくりと練り上げることでじっくりと取り組むことができた。
- ・ リレー授業を何度も参観することで流れが把握でき、本番の研究授業でも、生徒の発問に対する反応がある程度予想できた。
- ・ リレー授業に担任が携わることで、道德の授業スキルが向上した。

② 課題

- ・ 生徒の思いを更に深めるために、補助教材を利用するなど、効果的に題材に迫る工夫の必要性を感じた。

3. 言語活動の充実

「言語活動を通して培った基礎を活用していく力を伸ばす」「それを通して基礎をより確かなものにする」といったねらいをもって、言語活動の場を授業の中に設定することを意識し、授業実践を進めてきた。そのため、話し合いを通じてお互いの思考を深めたりまとめたりしながら課題を解決していく「ペア学習」や「グループ活動」などの形態を取り入れて授業を行った。このような学習は、基礎的な知識・技能を活用して課題を解決していく能力とともに、人間関係を形成していく力も同時に生徒に身につけさせることにつながる。

今年度は、言語活動に関する取り組みは、各教科においてそれぞれ工夫し授業実践を積み重ねてきたが、学校全体で本校独自のスタイルを確立させるまでには至らなかった。このことについては、次年度重点的に取り組んでいかなければならない。

[学習意識調査による検証] 下の表のように「授業改善のための3つの視点」に基づく各教科の取り組みが生徒にも認識され、成果が上がっていることがわかる。

質 問		H19	H20	H21	H22
○「授業はわかりやすい」と感じている生徒が多い。					
1	授業のめあて(ねらい)はつかんでいる。	61	74	78	81
2	授業にはやってみたいと感じる課題が多い。	49	54	56	63
3	授業の中に考える場面や発表する場面がある。	75	82	81	87
4	授業での先生の説明やアドバイスはわかりやすい。	76	83	86	88
5	先生はやる気の出るような言葉をかけてくれる。	56	63	61	69
6	先生は授業で困っているときに支援してくれる。	75	81	81	84
○あきらめないで最後まで考える生徒が多い。					
7	記述式で理由を考える問題も空欄にせず答える。	44	71	77	77
8	難しい課題や問題でもあきらめずに取り組む。	69	69	73	76

(数字はすべて%で、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計である。)

その一方で、「授業にはやってみたいと感じる課題が多い」「先生はやる気の出るような言葉をかけてくれる」などの項目は徐々に増えてきており、取り組みの成果は出てきているが、それでもまだ生徒の満足度が低い。これは過年度を通しての課題である。興味関心を引き出す課題を設定し、形成的な評価をこまめに行うことによって、生徒の意欲を高めていきたい。

質 問		H19	H20	H21	H22
1	授業中、進んで発言したり質問したりする。	31	32	34	50
2	自分の考えを発表したり話し合ったりする授業は好き。	—	33	32	51

(数字はすべて%で、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計である。)

教師側の授業改善が確実に進むにつれ、生徒の授業に対する意欲も以前より次第に高まってきている。この意欲をさらに向上させるために、今まで以上に指導のねらいを明確にし、さらに目標実現のための方法や手だてをしっかりと指導することを意識して、言語活動を充実させていく必要がある。日々の授業を魅力的なものにし、生徒が主体的に授業に取り組めるようにしていきたい。



4. 習熟度別少人数授業(数学科・英語科)の充実

今年度は数学科、英語科で習熟度別少人数授業を行っている。どちらの教科も1クラスを2つのコースに分けた。ひとつは基礎基本の定着を重視した基礎コース、もう一つは基礎基本の定着に加えて、補充発展的な内容も扱う発展コースである。コース分けは、英語科と数学科では異なる方法をとっている。数学科は、単元により得意不得意があるので、新しい単元に入る前にレディネステストを行い、そのあと生徒の希望をとり調整している。一方、英語科は知識を積み上げていく教科なので、5月初め頃まで一斉でTTの授業を行いながら生徒の様子を観察し、そのあと希望をとりコース分けしている。希望をとると、「苦手だから」「自信がないから」という理由で基礎コースを選択する傾向がある。基礎コースの人数が多いと、習熟度別授業のねらいを達成しにくくなるので、生徒にはコースのねらいを明確にしてコース選択をさせている。

2つのコースの特徴として、基礎のコースは、教科として身につけなければならない大切な事柄を定着させることに時間をかけ、メンバー同士での学びあい教えあいを多く取り入れている。それに対して、発展コースは、個人で考える時間を十分に与え自分の考えを発表させたり既習事項を使ってさらに発展した問題に取り組んだりしている。



生徒のアンケートからは、数学・英語を問わず、「少人数での授業はよくわかる」「詳しく教えてもらえる」と回答する生徒が多く見られ、少人数授業のよさを生徒が感じ取っている。その反面、「少人数授業がもっと増えたらいいと思うか」という質問に対して、否定的な回答をする生徒の割合が高いことが課題となってい

る。この課題を解決するために、授業の形態、進め方、指導方法などをさらに改善し、どの生徒も少人数授業は学習成果があると感じたり、効果的であると感じたりするように努めていかなければならない。

5. 基礎的な知識・技能の習熟の徹底

学校研究の重点のひとつとして、基礎基本の定着があげられている。各教科部会では、年度当初よりいろいろな方策を考え実践してきた。基礎・基本がしっかりと定着すれば「授業が分かる」「授業が楽しい」など相乗効果が表れてくる。そのために、授業では、演習の時間を確保したり小テストを実施したりして基礎基本のいっそうの定着を図ってきた。また、選択授業でも基礎的、基本的事項を習熟させるため、演習を多く取り入れた授業を多く行っている。具体的には、国語科や社会科の授業の初めに行う小テストや英語科のプログラムテストなどで学習事項の定着をねらった取り組み、数学科などでのワークを利用した宿題指導、理科の実験レポートなどに代表される実験や操作活動をまとめることによって得られる知識など、各教科でもそれぞれに基礎の定着を図る工夫に取り組んできた。

6. 家庭学習の充実

今年度は、「基礎基本の定着を図る」ことを念頭に、家庭学習の習慣化も重点事項にあげて各学年・各教科において取り組んできた。

学年当初は、新学年への適応とともに中間テストへの対応に関する指導を行った。各教科の指導では、ワークを埋めることが学習ではなく複数回行うことで力がつくことやテスト直しの効果的な方法など復習の重要性について学年会や各教科から工夫して指導を行ってきた。また、1, 2学期中間テスト後に行った家庭学習調査の中の「学習の工夫」を学年だよりに書き、生徒に還元した。

3学年ともに取り組みを進めている「自主勉強ノート」は、小学校からの継続であることをふまえ、中学校ではもう一步踏み込んだ内容で生徒に指導を継続してきた。授業ノートの復習やワークの復習、テストや授業で間違えた問題のやり直し、単元のまとめ、漢字や計算のドリルなど、復習中心に1日1~2ページ以上するよう生徒に求めている。どの学年もほとんどの生徒が毎日忘れずに取り組んでいる。また、学級だよりや学年だよりにおいて、手本となるノートを紹介し、他の生徒のイメージをふくらませたり、意欲を向上させたりする工夫も見られた。また、教科によっては「今日の家庭学習」にどんな復習や演習をすればよいのかを意義とともに助言して授業を終わるといったような授業と家庭学習をつなぐ取り組みもみられた。

○平日の家庭学習時間(学習塾なども含む)／H20～H22 経年比較 (生徒：全数調査)															
＼時間	ほぼ0			1時間未満			1～2時間			2～3時間			3時間以上		
1年	2	0	1	33	34	32	46	54	53	16	9	12	3	3	2
2年	8	3	7	50	41	50	32	44	35	9	10	7	1	2	1
3年	11	1	3	24	13	19	22	44	34	30	29	28	13	13	16

※数値は、左側から H20 年 11 月、H21 年 10 月、H22 年 10 月の調査の回答率(%)を表す。

家庭での学習時間については、年によってばらつきは見られるが、わずかながら2年生において少なくなる傾向が見られる。これは、中間学年になると学校生活にも慣れ、気がゆるむせいかもしれない。しかし、どの年も3年生になると部活動を終え高校受験が差し迫ってきて、家庭学習にも熱が入ってくるにつれ、しっかりと学習時間は増える。学習時間は基本的には各家庭の考え方によるところが大きく個人差もあるが、1年生段階から1時間未満の割合は減らしていかなければならない。学習の意義やその内容への助言も含めて、家庭学習が“習慣”となるまで、根気強く継続的・計画的な指導をしていかなければならない。

学級活動年間計画には、(3)学業と進路(ア)学ぶ意義(イ)自主的学習態度など学習適応に関する内容は1年生一学期の中間期末テスト及び各学年の夏休み・冬休み・春休みの前の計画に関するものなどにとどまっているが、今後、入学・進級時、部活動シーズンの切り替え時、体育祭・文化祭など大きな行事のあとなど、節目節目に計画的系統的で適切な指針を提示できるよう計画の中に位置づけていくことが必要である。

7. 研究実践の計画的な評価と改善：PDCAサイクルの活用

① 「各教科における学力向上に向けた授業改善の方策」の利用

年度当初に立てた「授業改善の方策」に基づいて、各教科で取り組んできた研究実践を、一学期末・二学期末に振り返り、その時点までの成果を確認するとともに、課題に対しての改善策を講じてきた。また、それを冊子にまとめて読み合わせることで、教科を超えて共通している新たな課題をも見出すことができた。

② 「全国学力調査・石川県基礎学力調査・学習意識調査」等の利用

全国学力調査・石川県基礎学力調査や体力テストなどをもって、指導内容の定着の度合いなどを検証し、各教科の「学力向上に向けた授業改善の方策」に掲げられた重点目標や具体的な方策など、その指導法について改善を加えている。

また、全国学習意識調査のほかに本校独自の「学習意識調査」を実施し、生徒の学びの様子をつかむとともに、授業改善の取り組みや家庭学習の状況を検証している。

「ふだん家庭でしている勉強は？」(生徒：全数調査)		全校	1年	2年	3年
1	学校から宿題が出れば、その宿題をする。	90	92	86	92
2	テストがあれば、それにそなえて勉強する。	82	79	82	88
3	復習をする。	70	80	72	61
4	予習をする。	24	40	18	15
5	興味があることを自分で調べたり確かめたりする。	12	12	13	11
6	学習塾等での宿題が出れば、それをする。	28	21	23	41

(※数値は、6・10・12月の調査の回答率(%)の平均値を表す)

これによれば、家庭での普段の学習内容は、①宿題、②小テストや定期テストに向けての勉強③復習と続き、予習は約24%である。1年生の予習の割合が高いのは、英語科において授業内容を事前に予習してくる課題を取り入れているからだと思われる。一方、3年生の復習の割合が少ないのは、受験対策の学

習に追われて日々の授業の復習にまで手がまわらない状態になっていると推測されるが、復習の重要性を説くなかで回を重ねるごとに 49% (6月) →61% (10月) →72% (12月) と復習する生徒の割合が伸びてきている。

その他、学習意識調査は、学習習慣・学習への姿勢・学習環境や各教科の授業について等合計 34 項目について寺井中学校全生徒の学習に関する意識を調べたものである。詳細は、資料編に掲載してある。

③ 「生徒による授業評価アンケート」結果の活用

今年度は、確かな学力の向上のための評価資料および教師の授業力向上のための客観的資料を得るために、生徒による授業評価アンケートをおこなった。これは、授業者である教師の思いと生徒の反応のずれを把握し、授業を改善していくときの一つの指標とするために行うものである。

◆実施要領

- ①時期 7月末、12月末の2回
- ②対象 寺井中学校全生徒
- ③集計 マークシートを使い、結果は機械読み取りで行う
- ④結果 全体および各教科の平均値を全職員に公表する
個人の数値データは本人のみに知らせる
- ⑤活用法 個人で授業改善に生かす
- ⑥項目 設問1. 授業はわかりやすい
設問2. 授業は、興味関心が高まり楽しい
設問3. 授業やプリントは見やすく、わかりやすい
設問4. 授業の進む速さはちょうどよい
設問5. 質問したら、わかりやすく教えてくれる
設問6. 先生の熱意や教え方の工夫が感じられる
(ただし、技能教科は3. の項目を省略する) 合計 50 項目

授業評価を行うことで、結果が客観的数字で出るため、最初は抵抗がある者もいたが、1学期末と2学期末に評価を行うことで、自分の授業を振り返るよいきっかけとなったようである。授業評価は、教師の授業力向上を通して生徒の確かな学力の定着や向上をめざしたものであり、教員の評価を目的としたものではないことを確認して始めたので、教科間や教員間での競争意識などは感じられなかった。

寺井中学校授業評価 (生徒全数調査)		7月	12月
	全項目合計	88	88
設問1	授業はわかりやすい	89	89
設問2	授業は、興味関心が高まり楽しい	81	82
設問3	授業やプリントは見やすく、わかりやすい	90	90
設問4	授業の進む速さはちょうどよい	88	89
設問5	質問したら、わかりやすく教えてくれる	90	89
設問6	先生の熱意や教え方の工夫が感じられる	90	91

(※数値は、A そう思う B ややそう思うの合計回答率(%)を表す)

結果を考察すると、生徒は全項目において非常に高い評価をしていることが

分かる。今後は、この評価に甘んじることなく、授業改善を追求していかねなければならない。

8. 外部講師(研究アドバイザー)による指導助言

昨年度に引き続き、今年度も金沢大学の太田実教授に研究アドバイザーを依頼し、本校の研究を客観的な視点から見つめ、昨年度からの本校の研究の経緯を踏まえた適切な指導助言をいただいた。

5月には、計画訪問前の模擬授業を含む指導案検討に参加していただき、本年度の研究の方向性について助言をいただいた。8月には、校内研修会に参加いただき、視聴覚機器の効果的な生かし方についてご指導をいただいた。電子黒板を使った授業の紹介やデジタルコンテンツの紹介などがあり、電子黒板のイメージを広げるのに非常に効果があった。ただ、電子黒板を使うには、本校および能美市の情報に関する制約は大きすぎることも指摘していただいたので、改善していきたい。10月には、本校の小中連携研究会の研究発表会「NOMI ばんぶー寺井」の指導講話講師として来校を願った。「授業における視聴覚機器の効果的な活用法」と題してお話をしていただいた。電子黒板を使うことの利点や使用するときの留意事項、情報教育をより発展させるための環境の整備などについて今後の示唆をいただいた。このあと2月には、今年度の学校研究の総括を踏まえたご指導をいただき、次年度の研究の方向を決定していく予定である。



9. 生徒・保護者等への啓発

生徒や保護者に対して、本校の学力向上への取り組みや生徒の学習に向かう様子などを「学校だより」や学校ホームページ等で紹介したり、学年だよりや学級だよりなどで発信してきた。保護者アンケートでは、学校からのたよりはわかりやすく参考になると回答した人が多く、今後も継続して家庭へ向けてたよりやホームページ等で発信していかねなければならない。また、学年集会では生徒の方から学習面についての自分たちの取り組みの内容や結果を報告する場を設け、学習に対する意識を高めるようにしてきた。各学年で行われる保護者対象の学年懇談会では、生徒の家庭学習アンケートの家庭学習時間を一つの資料としてあげ、家庭学習のあり方を話題にして話し合った学年もあった。その中では、自主勉強やワーク・宿題の仕方、各教科の学習の仕方に関する質問も出され、保護者の家庭学習に対する関心の高さが伺えた。

12月には、中学校PTA教養委員会とタイアップした形で、生徒および保護者対象の教育講演会を開催した。講師は、いわゆる「東大ノート」の太田あや氏で、「500冊のノートを取材して気づいたこと」の演題で話していただいた。授業ノートを作るときのポイントや自分の学力を高める時の有効なノートづくりなど、生徒にとってわかりやすく具体的なお話であった。その後の授業では、行頭をそろえたり、板書だけでなく先生の話もノートに書き入れたりしている生徒が見られ、ノ

ートづくりのきっかけとしてよい機会になったようである。講演会記録はまとめ、全家庭へ配布するとともにホームページにも掲載した。

今後も家庭学習に関しての情報は、各種便りやホームページはもとより、学校公開や懇談会などの機会を利用してできるだけ多く保護者の元へ届けるようにしていかなければならない。

保護者アンケート 1 月（各学年 1 学級抽出）割合（％）	そう思う	やや そう思う	あまり 思わない	思わない
学習に関する学校からの便りはわかりやすく参考になる	20	66	14	0

B. 豊かな心を育むための取り組み

1. 「心のテーマ」を軸とした道徳・特別活動等の実践

月ごとに設定されている「心のテーマ」に沿って、あらゆる教育活動が計画・実行されている。そのため、テーマに沿った「指導方針」を職員会議でしっかりと共通理解している。

道徳・特別活動・総合的な学習の時間の年間計画もテーマと連動している。これらの活動で重複するような内容や、逆に不足であると思われる内容については、昨年度の反省をもとに整理し、それぞれの領域がより効果的に機能できるよう計画の見直しを行った。道徳教育全般・特別活動全般について推進の核となるように、一昨年度から「道徳部会」「特別活動部会」を校務分掌の中に位置づけている。

生徒会活動や学校行事の中にも「心のテーマ」は関連しており、生徒は「心のテーマ」に関連する項目内容について道徳の時間にじっくりと向き合ったり、学活等の活動の中で感じたりすることによって豊かな心を耕していく。また、「心のテーマ」は基本的には毎年同じものであるため、上の学年ほどその時期に求められる姿や気持ちを大切に作る姿勢が見られるようになっている。

2. 「道徳の時間」の実践

今年度の学校研究テーマである、“一人ひとりの「ゆたかな学力」を育む学校づくり”の基盤として、『豊かな心』を育む柱として、道徳の時間を大切にしてきた。そこで、今年度、本校では、道徳の授業を充実させていくために、いくつかの重点項目を意識して取り組んできた。

- ①毎月の「心のテーマ」にそって計画した道徳の授業に使用する資料・指導案・ワークシートなどを、毎月の学年会で道徳担当が提案し、教師ができるだけスムーズに授業に入っていけるよう整備した。また、全校集会において様々な職員が心のテーマについて「ちょっといい話」という全校道徳を行い、学校全体で取り組む姿勢を大切にしてきた。
- ②授業参観や研究授業の際、積極的に道徳の授業を行い、それに先立ち学年間でのリレー授業を実施しお互いの研修の機会にした。
- ③新聞やDVDなどの新しい資料の開拓を積極的に行い、今までの道徳ファイル以外にも良かった資料を使った授業実践を行った。2年では、根上中学校の研

究授業を参考に、資料「オーストリアのマス川」を題材に「自分の良心に照らし合わせて行動すること」をねらいとした授業を実施した。

- ④生徒からの意見をフィードバックする方策の一つとして、学級だよりを通して、あるいは教室掲示をし、意見交流の場を増やす工夫を行った。

～成果と課題～

本校の現状を鑑みると、まず「道徳の授業の工夫とその実践」が肝要であると思われる。授業では、良い資料を通して新たな価値観に触れること、また他の意見を聞く姿勢を養うことをそのねらいとしてきた。

年度末の職員アンケートでは、70%以上の職員が「道徳教育で様々な価値観と触れ、生徒の心の成長が感じられた」と回答している。

しかし、一方でアンケートのその他の結果を見ると「自分の意見が自由に言える」という項目において40%の職員が「そう思わない」を選択している。発言しやすい授業の雰囲気作りという面では課題が残されている。

今後新たな資料開拓を行うことはもちろん、様々な授業展開を試行錯誤し、継続して授業実践することを課題とし、さらに研究と研鑽が必要である。

3. 特別活動等での実践

本校では行事で生徒を育てるという方針のもと、特別活動の年間計画を作成し、その中でそれぞれの行事を位置づけて取り組んでいる。

本校における二大行事として、体育祭と文化祭があるが、生徒一人ひとりが取り組みを通して、つながりを持ち、リーダーや係りの責任を果たす中での人間的な成長を促している。また、異学年との交流も行われ、その中において、理想の上級生像を互いに持つことにより、次年度への更なるつながりと飛躍に役立てている。

そのような中で、体育祭では体育科まかせ、合唱コンクールでは音楽科まかせにせず、職員会議等の提案で共通認識に至り、教師集団が一体感を持って取り組む体制が取れていることは、本校の良さであると考えます。

また、行事はイベント化させないことが真に大切であるということも共通認識されている。「行事による経験やつながりを生かし、行事後の日常をさらに良いものとするところこそ大切である。」ということを行事後、生徒に常に声をかけ、行事を単なるイベントにしないということを強く意識している。

また、ボランティア体験活動におけるクラスごとの活動や三年間を見通した段階的な進路学習が本校の特別活動の柱であるが、近年は人間関係を良くするスキル学習も取り入れている。

実践例 1年生 題材名：「意思決定スキルを身につけよう」 11月29日実施

(1) ねらい

集団生活を営み、社会の一員として生活する上で、「責任を持つ」とはどのようなことなのかを具体的に考えることによって、責任ある行動か無責任な行動かを判断できるようにすると同時に、無責任な行動が自分自身や周囲の人に与え

る影響を考えることができる。

(2) 活動内容

マキエとハルミによる事例を読み、二人のやり取りからどこが無責任な行動なのかを考える。また、その無責任な行動を取ることによって、自分や周囲はどのようなようになるのかを話し合い活動を通して考えていく。その後、とるべき行動を考え、また、自分の今までの行動を振り返り、これからの生き方に生かしていく。

(3) 実際の授業

リレー授業によって、他の学級で行った指導案を練り直しながら、本時指導案を作成した。授業の中では、個人で考えたことを少人数グループの中で話し合い、友だちの意見を参考にしながら自分の考えをまとめていき、最後に発表した。

(4) 授業を終えて

授業整理会の中では、学活の授業と道德の授業の違いについて確認した。学活は、本時の中で自分が何をしなくてはならないかを決定しなければならない。このことは昨年度も話し合われたことであり、今後も学校内で確認していかなければならない。

C. 研究実践の公開

10月5日に能美市小中連携研究会「NOMI ばんぶー寺井」の研究発表会が本校で行われた。この発表会は、能美市指定の視聴覚機器活用推進校の発表も兼ねており、寺井中学校校区3小学校の先生方に来校いただいたの授業公開と授業整理会、指導講話という内容であった。

当日は、国語科、社会科、数学科、理科、英語科、音楽科の6教科の授業を公開し、視聴覚機器の使い方および授業の進め方を話題とした授業整理会を行った。公開授業は、3つの視点を大切にしたこれまでの寺井中学校の取り組みの内容が十分現れたものとなり、参観された先生方からも高い評価を受けた。授業整理会では、それぞれの授業で使われた視聴覚機器について小中共通の視点で話し合いがなされた。特に電子黒板の使い方では、各校それぞれに使用方法の工夫があり、大いに参考になった。



また、本校の研究アドバイザーである金沢大学教授大谷実先生に「授業における視聴覚機器の効果的な活用法」という題で話していただいた。能美市全校に1台ずつ配備されている電子黒板を中心にして、視聴覚機器をいかにして授業の中で効果的に取り入れるか、今後の情報教育のあり方も含めての内容であり、今後の取り組みに大いに参考となった。

V. 研究の成果と課題

《今年度の成果》

- ①【**研修スタイルの確立と実践**】 昨年度以降めざしてきた本校独自の研修スタイルが確立し、実践できるようになってきた。
 - *豊かな心が基盤となって初めて確かな学力の向上が願える。「豊かな心」と「確かな学力」は偏ることなくどちらも大切に育てていく。
 - *教科共通の「学力向上のための3つの視点」を持ち、学校全体が一つの方向に向かって授業改善に臨む。
 - *授業研究の中心に模擬授業やリレー授業を据え、教科や経験を越えて協議する。
 - *学力調査や生徒の学習意識調査、生徒による授業評価などを利用して研究実践を計画的に評価し、授業改善に役立てる。
 - *外部講師の先生に研究アドバイザーとして広い視野から指導助言を請う。

- ②【**基礎・基本の定着**】 課題に対して、少人数グループで考えることを取り入れることによって、より深くより広く考えることができるようになり、思考や理解も深まった。また、習熟の時間や機会を増やすことによって、学習内容の定着を図ることができるようになった。

- ③【**言語活動の充実**】 各教科で「学び合い」の場を設定し、生徒の言葉を活かして生徒に考えさせたり自分の考えを整理し発表し高め合ったりする授業を作ることができた。今後は、教科を横断した本校独自の授業スタイルを確立させていかなければならない。

- ④【**授業評価導入による授業改善**】 昨年度までの課題であった生徒による授業評価を導入することによって、生徒目線の評価を教科や個人の授業改善に生かすことができるようになった。

- ⑤【**家庭学習の習慣化**】 復習の意義を再認識し、学習の定着を意識した家庭学習を推し進めることができた。各学年・各教科で、単に家庭学習を勧めるのではなくその意義や効果的な方法にも目を向けていくような流れが出てきたことは評価できる。習慣化については、各学年とも自主勉強やワークを中心とした家庭学習を呼びかけていくとともに、週末課題などを宿題として与える等、家庭学習を習慣づけるきっかけを作る工夫も行ってきた。また、学習内容や学習時間などを保護者にも伝え、家庭と連携しながら取り組むことができた。しかし、習慣化されていない生徒もまだ多いので、引き続き取り組みを継続させていかななくてはならない。

- ⑥【**視聴覚機器の活用**】 能美市の視聴覚機器活用推進校の指定を受けたことをきっかけに、電子ボードや液晶テレビ、パソコン、DVD、デジカメなどの視聴覚機器を授業の中で活用することが増えた。それに伴い、生徒の授業に対する興味関心も高まった。

- ⑦【組織的な研究推進】 研究推進委員と教務部会委員を重ねることによって、打合せの時間が弾力的にとれるようになった。また、学年主任を含む各学年代表が所属することで、研究推進委員会で議論された内容が学年会で具体化されやすくなり、組織的に研究推進を行うことができた。

《次年度への課題》

- ①「生徒の言葉を生かした学びの創造」をめざして

生徒がよりいっそう主体的・積極的に活躍できる授業をめざしていききたい。生徒の言葉を大切にし、生徒同士が質問しあったり、意見を出し合ったり、自分たちでまとめていったりするような授業づくりを進めていかななくてはならない。そのためには、これまで培ってきた実践を継承させるとともに、活用力を高めたり言語活動を充実させたりしていかなければならない。

- ②授業におけるスタイルの確立

各教科に共通した授業づくりや授業改善を進め、めざす生徒像に近づくために課題①を具体化させた授業におけるスタイルづくりが必要となる。言語活動を取り入れた本校独自の授業スタイルを確立させたい。これがあると、どの教科においても大切にしている部分が同じであるため、教科を越えての取り組みや指導に一貫性が出てくる。

- ③保護者等との連携

学校の取り組みや生徒の活動の様子などを保護者等に積極的に知らせていくことによって、「うちの子は勉強の仕方がわからないのではないか」といった保護者の不安や悩みに応えることができる。我が子の家庭学習はまだまだ十分でないと感じている保護者も多いので、家庭との連携を強くし情報が届くようにしていきたい。

- ④組織的な研究推進

今年度の成果に挙げたように、研究推進委員会と学年主任を含む教務部会のメンバーを重ねることで、組織的に研究推進が行われた。次年度は、この組織をより発展的に動けるようにし、研究推進委員会を中心として、研究が教科部会と学年会双方向から進めることができるようにしたい。

◇22年度の研究のおもなあゆみ

月	日	全体の流れ	会合名	おもな内容
4	13	P 研究プランの作成	○研究推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度の研究方針確認 ・研究方針の確認
	15	P 研究の方針の確認	◎全体研修会	
	19	C 県全国学力調査（～20）		
5	11	P 学力向上プランの確認	○研究推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度の研究の概要および具体案作成 ・本年度の研究の概要および具体案確認 ・「各教科における授業改善の方策」策定 ・指導案作成・検討
	13	P 教科の具体案作成	◎全体研修会	
	26	D 校内研修会（模擬授業①） 金沢大 大谷実先生	◇教科部会 ◎全体研修会	
6	10	C 家庭学習意識調査	○研究推進委員会 ◇教科部会 ◇教科部会	<ul style="list-style-type: none"> ・計画訪問に向けての準備 ・家庭学習実態把握 ・計画訪問指導案検討作成 ・学校研究及び教育活動について指導助言を請う。
	7	DC 計画訪問（各教科）	◎全体研修会	
7	14	C 1 学期実践のふりかえり	○研究推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・1 学期実践の反省と夏季研修会企画 ・1 学期授業についての反省今後の方策 ・学力調査の分析及び対策の検討
	16	C 授業評価アンケート	◇教科部会・個人	
		CA 県全国学力調査の分析	◇教科部会	
8		CA 一学期の評価と修正	○研究推進委員会 ◇教科部会	<ul style="list-style-type: none"> ・「学力調査の分析及びその対策」策定 ・「授業改善の方策」および「学力調査」について成果課題の確認と対策の検討 ・「授業における視聴覚機器の効果的な活用法」についての研修会
	19	C 校内研修会（視聴覚） 金沢大 大谷実先生	◎全体研修会	
9	16	D 教科の実践	◇教科部会	<ul style="list-style-type: none"> ・N O M I ばんぶー指導案検討作成 ・「学力調査の分析対策」の共通理解 ・課題の確認と指導案検討
	21		○研究推進委員会	
	27	D 校内研修会（模擬授業②）	◎全体研修会	
10	5	D NOMI ばんぶー寺井発表 金沢大 大谷実先生	○研究推進委員会 ◇教科部会	<ul style="list-style-type: none"> ・授業力向上視聴覚機器の活用について、授業公開、分科会（授業整理会）を企画する。 ・大谷先生から指導講話をいただく。 ・家庭学習の実態把握、家庭との連携 ・指導案検討→指導案作成
	20	C 家庭学習意識調査	○研究推進委員会	
11	29	D リレー授業による研修 DC 要請訪問（道徳・特活、初任研）	○研究推進委員会 ◇学年部会 ◇学年部会 ◎全体研修会	<ul style="list-style-type: none"> ・要請訪問に向けての準備等 ・学年会による授業検討・実践・改良→指導案作成 ・道徳特活について研究授業を通しての研修指導助言をいただく。
12	22	CA 二学期の評価と修正	◇教科部会・個人	<ul style="list-style-type: none"> ・「授業改善の方策」成果課題の確認、対策検討 ・二学期授業についての反省今後の方策 ・学習意識調査からみる成果課題の確認 ・これまでの研究実践の評価
	22	C 授業評価アンケート	○研究推進委員会	
		C 学習意識調査		
1		D 教科の実践	◇教科部会	<ul style="list-style-type: none"> ・H22 年度総括 ・「研究のまとめ」作成 ・「研究のまとめ」全体での確認
	31	D 校内研修会（総括）	○研究推進委員会 ◎全体研修会	
2	21	P 校内研修会 大谷実先生 * 研究成果の発信	◎全体研修会 ○研究推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度研究成果と課題確認。 ・成果の発信（研究紀要、HP など）
3		P 次年度に向けて	◇教科部会 ○研究推進委員会 ◎全体研修会	<ul style="list-style-type: none"> ・三学期授業についての反省今後の方策 ・今年度の課題を踏まえ、次年度の方針を策定・検討する。

研 究 同 人

校長	谷口 徹	教頭	新保真由美		
教諭	櫻井 悠樹	教諭	武田 知之	教諭	園下 晶久
〃	北本 祥一	〃	東方 聡美	〃	池田 祥子
〃	西田 千鶴	〃	辻 研一郎	〃	太田 多門
〃	元田 真樹	〃	佃 洋子	〃	水摩 幸子
〃	前川真紀子	〃	小倉 貴道	〃	片村 俊和
〃	沖田 尚	〃	斉田 正春	〃	宮島 浩
〃	山本 哲夫	〃	斉田 博	〃	新宅 雅美
〃	道端 雅美	〃	畑中 敦子	〃	高木 樹
〃	松本 真子	〃	苗代ゆき子	講師	中村 晃子
〃	田淵 友香	〃	河合 誠	〃	石黒 擁
講師	山下 貴純	講師	澤 宏範	支援員	白尾 文子
養護教諭	山口菜穂子	ALT	Julia Caffrey	ALT	Andrew Decock
事務主査	介田 勝美	図書館司書	柿原真由美		
栄養士	板屋 美帆	研究アドバイザー	大谷 実教授(金沢大学)		